



神奈川県立歴史博物館 だより

令和 元年 8 月 20 日発行
通巻 212 号

AUG. 2019 Vol.25 No.

2

Newsletter of the Kanagawa Prefectural
Museum of Cultural History

【目次】

- なむあみだ仏はうれしきか—特別展「真教と時衆」によせて— …… 2
時衆に関わる彫刻—肖像彫刻と阿弥陀如来像— …… 6
THE けんぱく PUNCH やってみよう、ボランティア! …… 8

なむあみだ仏はうれしきか

— 特別展「真教と時衆」によせて —

小井川 理

時宗の宗祖一遍は自らの臨終の時を悟り、弟子のひとり他阿彌陀仏真教あみだぶつしんぎょうに問いかけます。「他阿彌陀仏、南無阿彌陀仏はうれしきか」と。その問いに真教は落涙し、一遍もまた涙する姿を見て、人々は、真教こそ一遍の教えを継ぎ世の人々を導く人であると語り合ったと言います（『遊行上人縁起絵』第4巻第5段）。

2019年は、時宗二祖と称される真教が文保3年（1319）相州当麻そうしゅうたいまの無量光寺（相模原市）に歿して700年の御遠忌にあたります。これを期して、全国に400か寺を数える時宗寺院に伝来する遺宝の中から真教や東国にゆかりの名品を一堂に会して二祖真教の事蹟と時宗の文化財を紹介します。

宗祖一遍、二祖真教、そして歴代上人へ

神奈川県藤沢市に総本山・清浄光寺（遊行寺）【図1】を置く時宗は、「南無阿彌陀仏」の念仏を勧めて諸国を遊行した鎌倉時代の僧、一遍【図2】によって開かれました。阿彌陀仏の名号を唱えることにより往生すると説く一遍は、昼夜六時（6回）念仏を唱え修行を行う「時衆（*1）」と呼ばれる僧尼と諸国を行脚し、貴賤道俗を問わず、念仏の功德を民衆

に説きました。彼らが始めた踊り念仏は人々の注目を集め、瞬く間に信仰を集めていきました。

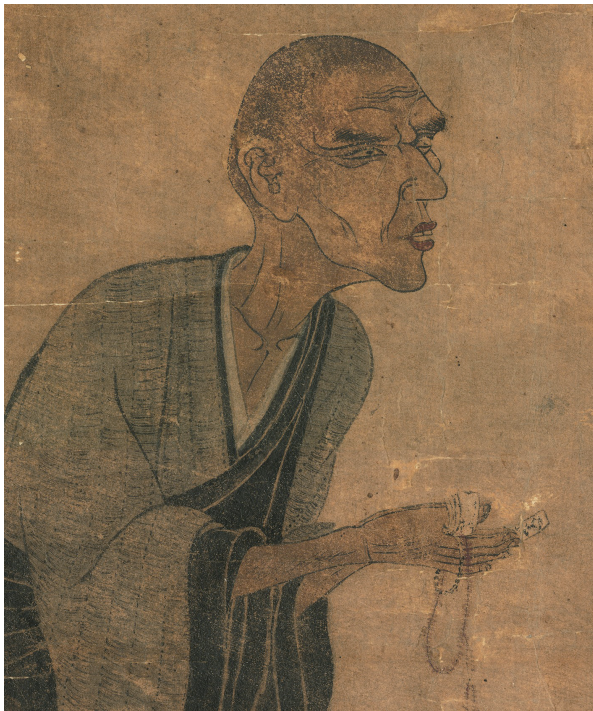
宗祖一遍と、後に一遍の跡を継いで教団をまとめていくこととなる真教との出会いは、建治3年（1277）と伝えられています（『一遍聖絵』第4巻第3段、『遊行上人縁起絵』第1巻第3段）。九州を遊行中の一遍は、御家人大友頼泰の帰依を受け豊後府中（大分市）に逗留していました。真教が一遍と出会ったのはその時。以来遊行の旅路を共にすることとなります。

一遍は生涯の大半を遊行に費やし、臨終に際しては「我化導は一期ばかりぞ」とそもそも教団を形作る姿勢や意志はなかったと伝えられています。一遍亡き後、念仏勧進の遊行をともにしてきた時衆をまとめ教団として確立したのが真教【図3】でした。

真教は北陸や関東にも遊行の歩みを進め、また京都には「道場」と呼ばれる修行の拠点を置いて、全国に広がる信仰の基盤を整えました。日々の修行の中で僧尼が守るべき事がらを明らかにして時衆の規律を強めました。こうして教団としての体制を確立したことが、真教が「二祖」と称される所以です。真教は諸国遊行ののち、相州当麻無量光寺に拠点を定め、



【図1】藤沢市の清浄光寺（遊行寺）2019年7月



【図2】「一遍上人像」 室町時代
神奈川・清浄光寺（部分）



【図3】「真教上人像」 南北朝～室町時代
滋賀・高宮寺（部分）



【図4】「道場誓文」 真教筆 嘉元4年（1306） 神奈川・清浄光寺（部分）

さらなる教団の強化と後進の育成に努めました。

「道場誓文」（神奈川・清浄光寺所蔵）【図4】や真教自筆の書状などからは、教団のあり方や僧尼の統率をめぐる心を配る姿がうかがえます。こうした細やかなやりとりもまた、教団の一体性を支えていたのでしょう。

真教ののちは、各地の道場を中心に、智得、呑海、浄阿らへと法統が継がれていきました。展覧会では、一遍や真教ら時衆を導いた上人の肖像彫刻や肖像画、所用と伝えられる品々にその人となりを見ていきたいと思ひます。

時衆の信仰と美術

宗祖一遍の教えを受け継ぐ時衆では、阿彌陀如来の名号を唱える「念仏」により往生すると説きます。浄土三部經（『無量壽經』・『觀無量壽經』・『阿彌陀經』）が宗派の根本經典であり、阿彌陀如来が本尊として信仰されています。この信

仰に基づいて「当麻曼荼羅」などの作例も寺宝として伝えられています。また、一遍が兼野権現から託宣を受け、真教が江州小野社を参詣したことなどもかわり、神祇信仰を背景とした作例があることも特徴の1つです。展覧会では、阿彌陀信仰、神祇信仰など、時衆の信仰に根ざした美術作品も紹介します。

彫刻では、特に仏師快慶が作った三尺阿彌陀像に範をとる立像形式の阿彌陀如来像や三尊像が多く残されています。また、一遍が善光寺に参詣し本尊阿彌陀如来を拝して二河白道の教理を感得したことから、善光寺式の阿彌陀三尊像も信仰され、各地の時衆寺院に作例が残されています（時衆の彫刻については、次稿「時衆に関わる彫刻―肖像彫刻と阿彌陀如来像―」をご覧ください）。

絵画では、阿彌陀如来や、観音菩薩、勢至菩薩の二尊を加えた阿彌陀三尊が正面向きに来迎する「阿彌陀来迎図」が見られます。一遍が善光寺参詣で感得した「二河白道図」【図5】

や、熊野権現^{ようごう}の影響により託宣を受けたことに由来する「熊野権現影响図」も興味深い作例です。

工芸では、遊行上人^{たなごころ}が掌にする「持蓮華」【図6】、時衆が遊行の際に着用する「阿弥衣」【図7】や携行する「十二光箱」、踊り念仏で用いられる「鉦鼓」や「鉦架」の例を紹介します。時衆の信仰や行儀と密接にかかわる品々をご覧ください。

遊行上人縁起絵

当館では、長年にわたり時宗寺院に伝わる文化財の調査に関わってきました。1985年度には特別展「遊行の美術」を開催し、調査研究の成果を発信しています。近年では2015年度に特別展「国宝一遍聖絵」を開催し、宗祖一遍の遊行の歩みを描き表す国宝「一遍聖絵」（以下、「聖絵」）を展示しました。この特別展は二祖他阿真教上人の700年御遠忌に向けて開催された展覧会の1つでもありました。

今回の展覧会では、「聖絵」から内容を継承しつつ、一遍

の跡を継いだ二祖真教の活動と教団の草創を描く「遊行上人縁起絵」（以下、「縁起絵」）を紹介します。「縁起絵」は清浄光寺本のほか諸本が制作され、各地の時宗寺院に伝えられてきました【図8】。

「縁起絵」には一遍と真教の宗教的な事蹟をクローズアップして描かれる点が見て取れます。一遍の念仏勧進を描きつつ各地をめぐる遊行の旅路を壮大な風景描写の中に描き出す「聖絵」とは異なり、「縁起絵」は、宗祖一遍から二祖真教へ受け継がれる法統や、真教によって一体性を強めていく時衆の姿をより明確に表しています。

二祖真教上人700年の御遠忌にあたる今回の展覧会では、「縁起絵」諸本の多彩な作風をお楽しみいただくとともに、時衆の教団史の上でも重要な作例である「縁起絵」が信仰の継承を支えていく役割も担っていることを感じていただければと思います。



【図5】「二河白道図」 南北朝時代
神奈川・清浄光寺



【図6】「持蓮華」 真教所持 鎌倉時代
神奈川・清浄光寺



【図7】「阿弥衣」 室町時代 神奈川・清浄光寺



【図 8】「遊行上人縁起絵（金蓮寺本）」 第 1 巻第 2 段 南北朝時代 京都・金蓮寺

東国と時衆

真教の教えを継ぐ吞海によって京都七条道場が、淨阿によって四条道場が整備されて京都を中心に布教教化が進む一方、真教は北陸から信濃、甲斐、上野、下野など東国諸国へ行脚しました。そののち、相州当麻山無量光寺【表紙写真】に独住し教団の活動を統率するようになります。無量光寺の墓所の一角には、1基の宝篋印塔が大切に守られています。この地に歿した二祖上人真教のお墓です。

九州で一遍に出会うまでの真教の経歴は明らかでないことも多く、出身地も豊後とも京都とも伝えられておりはっきりとしません。しかし、その後の真教の活動は、東国、そして神奈川という地と縁の深いものであったと言えるでしょう。一遍もまた関東から東北へと遊行の旅を続け、鎌倉の市中に入ることは叶わなかったものの、片瀬浜での踊り念仏に多くの人々が集まった様子が「聖絵」に描かれています（「聖絵」第6巻第1段）。一遍や真教にとって、東国は念仏勧進の修行の上でも重要な土地がらでした。

そして今、神奈川県には藤沢市に清浄光寺（遊行寺）、相模原市に無量光寺のほか、小田原市には真教の寿像（次稿参照*2）を伝える蓮台寺があり、また多くの時衆寺院がそれぞれの地域で信仰を伝えています。展覧会では東国の諸寺とそこに伝わる遺宝に、地域に根ざした時衆の歴史と信仰を見ていきます。

なむあみだ仏はうれしきか

一遍が真教に問いかけた一言「南無阿弥陀仏はうれしきか」。真教は涙をもって答え、一遍もまた涙をとみにしました。その涙は「うれしき」涙、ただひたすらに「南無阿弥陀仏」と称える念仏を受け継いでいくこと、阿弥陀如来を信仰しその光明に導かれ包まれて生きること、その喜びをとみにする言葉を超えたやりとりであったと言われます。時衆の礎をつくった他阿真教上人の御遠忌に、念仏によって受け継が

れ紡がれていく信仰の姿をご覧くださいと思います。

本展は、遊行寺宝物館を第1会場、神奈川県立歴史博物館を第2会場として会期を重ねて開催します。一遍と真教、そして時衆一時宗と縁の深い神奈川の地で、時衆の歴史と信仰に触れ、生み出された美術作品の数々をご堪能ください。

（こいかわあや・主任学芸員）

*1 一遍や真教の時代、遊行の旅に同行した僧尼は「時衆」と呼ばれていました。やがて「時衆」は教団としてのまとまりを示す語としても用いられるようになります。現在の宗派の呼称である「時宗」が用いられるようになるのは、宗門改制度の整備された江戸時代以降のことです。今回の展覧会では、一遍や真教の時代に焦点をあて、「時衆」の名を展覧会のタイトルとしています。

*2 実在の人物を表す肖像（彫刻、絵画）のうち、像主が存命中に制作されたもののこと。

時宗二祖上人七百年御遠忌記念

特別展 真教と時衆

第1会場 遊行寺宝物館

会期：2019年9月7日（土）～11月10日（日）

第2会場 神奈川県立歴史博物館

会期：2019年10月5日（土）～11月10日（日）

両会場とも会期中展示替を行うため、本稿でとりあげた作品が展示されていない場合があります。

二祖真教上人七百年御遠忌事業については、時宗総本山遊行寺ホームページ内、以下を参照ください。

<http://ureshikika.com/>

時衆に関わる彫刻—肖像彫刻と阿弥陀如来像—

神野 祐太

特別展「真教と時衆」では、真教上人の肖像彫刻はもちろん、時衆に関連する彫刻作品を多数展示します。宗祖一遍上人の事蹟を記す一遍聖絵においては、彫像が描かれる場所が3か所ほどありますが、12巻という長い絵巻であることを考えれば少ないと言ってよいでしょう。聖絵に描かれる数少ない仏像はすでに存在している古仏（伊予国菅生の岩屋仙人堂の法華仙人像や尾張国甚目寺の毘沙門天像）を描いており、一遍上人が仏像を造ったり、造らせたりする場面は描かれていません。一遍上人の肖像彫刻が初めて登場するのは、兵庫観音堂で逝去後のことです。この肖像彫刻は現存しませんが、この像が時衆の関係した最も早い造像といえるでしょう。その後、二祖真教上人は時衆を教団として組織し、相模国当麻（現、神奈川県相模原市）の無量光寺や京の七条道場金光寺をはじめ、拠点となる道場や寺院を建立していきました。そこには、『阿弥陀経』を所依の經典とした一遍上人の流れを汲んだ阿弥陀如来像が本尊として安置されました。また、真教上人の「知識帰命」という教義により、一遍上人や真教上人をはじめとする遊行上人の肖像彫刻をも礼拝することがおこなわれました。



【図1】「真教上人坐像」 木造 鎌倉～南北朝時代
重要文化財 山梨・称願寺

肖像彫刻

時衆関係の彫刻では肖像彫刻が特筆されます。本展覧会は、二祖真教上人の遠忌に関わることから、関東に所在する真教上人の肖像彫刻を中心に紹介します。まず、神奈川・蓮台寺真教上人坐像です。この像は、頭部の内割り面に墨書銘があり、真教上人86歳のときに造像したことがわかる寿像です。現存する時衆の肖像彫刻の中で最も古い寿像であり、時衆教団の成立を考えるうえでも重要な尊像です。他の作例として蓮台寺像と作風が似る東京・法蓮寺像、真教上人が遊行をおこなった甲斐国に残る山梨・称願寺像【図1】があります。いずれの尊像も真教上人の威厳を現在に伝えています。

続いて真教上人の弟子たちの肖像彫刻です。宮城・真福寺安国上人坐像【図2】は、京都・長楽寺に伝わる時衆の肖像彫刻に作風が似ており、同じく七条仏師の手になると考えられています。新潟・称念寺一鎮上人倚像は珍しい椅子に坐る像であり、これも七条仏師の関わりを感じさせます。神奈川・清浄光寺吞海上人坐像は、近世を代表する時衆の肖像彫刻のひとつです。原像は惜しくも天正16年（1588）に焼失し、その後すぐに再興されたことがわかる室町時代彫刻の基準作例です。

多様な阿弥陀如来像

現在の時宗寺院に伝わる本尊やその他の仏像には、来迎印を結んだ阿弥陀如来立像が多いです。独尊の阿弥陀如来像、阿弥陀三尊、善光寺式阿弥陀三尊に大まかにわけられます。また、前述のように時衆成立以前の古仏や霊験仏を導入していることが特色といえます。

神奈川・蓮台寺阿弥陀三尊像の中尊は解体修理中に像内より延応元年（1239）の造像銘記が確認されました。この造像銘記は神奈川県内で5番目に古いもので、1230年代の在銘彫刻は1点も知られていなかったもので、神奈川の彫刻史の中に大変重要な基準作例を加えることになりました。本展覧会が修理後初公開となります。神奈川・教恩寺阿弥陀三尊像は、東国では珍しい仏師快慶の作風を示します。本展には出品されませんが、栃木・真教寺には快慶作の阿弥陀如来



【図2】「安国上人坐像」 木造 南北朝時代
仙台市指定有形文化財 宮城・真福寺

立像があり、滋賀・阿弥陀寺や京都・聞名寺には快慶の高弟行快が造像した阿弥陀如来像や脇侍像が伝わります。快慶や行快が時衆とかかわりを持つことは年代的にずれがありますが、時宗寺院には教団を形成する以前の仏像が伝わります。

神奈川・光触寺阿弥陀三尊像（本展未出品）は、運慶が造像したという伝承があります。鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての鎌倉における運慶の影響を考えるととても重要な作例です。時衆と、運慶に連なる七条仏師は同時期に京都で深い関係でした。関東においても、時衆と七条仏師との関係性が窺われる資料としての側面もあるのではないのでしょうか。

一遍聖絵によれば、一遍上人は、信濃国善光寺に文永8年（1271）、弘安2年（1279）、翌3年にかけて、真教上人は弘安2、3年と永仁5年（1297）に詣でており、時衆にとって善光寺は重要な寺院のひとつでした。その善光寺の本尊は三国伝来の阿弥陀三尊像として中世に模刻像が多数造られました。本展では、宝治3年（1249）の埼玉・向徳寺阿弥陀三尊像、千葉・善照寺像、同本福寺像の3件が出品されます。また、真教上人が独住した神奈川・無量光寺には鎌倉時代の善光寺式阿弥陀三尊像の脇侍像1軀【図3】が伝わり、



【図3】「菩薩立像」 銅造 鎌倉時代
神奈川・無量光寺

同上人ゆかりの仏像ではないかとの指摘があります。

本展では、普段は拝することができない肖像彫刻や仏像を観ることができるたいへん貴重な機会となります。展覧会会場で直接、時衆（時宗）や真教上人の教えの一端に触れていただければ幸いです。

（じんの ゆうた・学芸員）

主な参考文献

- 神奈川県立博物館編『遊行の美術』図録（神奈川県文化財協会、1985年10月）
- 薄井和男「仏像彫刻」（『清浄光寺史』藤沢山無量光院清浄光寺、2007年9月）
- 薄井和男「一遍聖絵」に描かれている一遍上人像？」（神奈川県立歴史博物館編『国宝一遍聖絵』図録、遊行寺宝物館、2015年10月）
- 京都国立博物館・朝日新聞社編『国宝一遍聖絵と時宗の名宝』図録（京都国立博物館・朝日新聞社、2019年4月）



やってみよう、ボランティア！

神奈川県立歴史博物館では、毎日ボランティアの皆さんが活躍中なのをご存知ですか？今日は、おなじみ営業部長のパンチの守に、当館のボランティアについて教えていただきます。

ーパンチの守営業部長は、館のボランティアの皆さんのことをよくご存じなんですよ。

パンチの守（以下、パ）：当然じゃ。当館にはなくてはならない存在じゃからのう。

ーどのような活動をされているんでしょう。

パ：まず、当館のボランティアには、「行事補助ボランティア」と「展示解説ボランティア」の2種類があるのじゃ。行事補助ボランティアの皆さんには、当館で実施する各種の講座等の催し物で、受付などの運営を補助していただいている。一方、展示解説ボランティアの皆さんには、各人週1回、決まった曜日に活動していただいているのじゃ。常設展に常駐し、展示資料の看視の他に随時案内・解説も行う。さらに、特別展開催中は、1日2回、来館者に対する展示解説を行うのじゃぞ。



行事補助の様子

学生への展示解説



ーへーえ、来館者への解説もされるなんて、すごいですね！

パ：そうじゃろう？そのために、新規登録時に行う研修で、当館の常設展示の概要を学んでいたのじゃ。また、各特別展の開幕時には、担当学芸員の勉強会に参加して、特別展の内容をじっくり学んでいたのじゃ。

ーなるほど。皆さん、よく勉強なさっているんですね。

パ：左様。ボランティアの皆さんには無償で活動していただいているが、活動を通して、「かながわの文化と歴史」を学ぶことができるのじゃ。それに、お客様の理解の助けになることで、やりがいを感じていただいているぞ。

ーでは、これからボランティアになってみたいと思ったら、どうしたらいいのですか？

パ：まず、当館 HP の「学習支援」内の項目「博物館ボランティア」をチェックしてほしいのう。ボランティアの応募条件・募集方法などが掲載されておるぞ。それから、今年9月21、28日に実施する「博物館入門講座」では、博物館の活動を実際に体験しつつ、ボランティアの説明も受けることができるので受講するとよいぞ。

ーでは、さっそく館の HP で「博物館ボランティア」「博物館入門講座」をチェックですね！

パ：うむ。約90名の元気なボランティアの皆さんが、新しい仲間を首を長くして待っておるぞ。

現在20代から70代の皆さんが元気に活動しています。興味を持たれた方は、ぜひ博物館 HP 「博物館ボランティア」の項目をご覧くださいね！

（大島 理加 / おおしま りか・企画普及課主査）



営業部長
パンチの守

